

Japan Association of Synthetic Anthropology

総合人間学会

Newsletter 第41号 2021年8月13日発行

発行人: 古沢広祐

事務局: 〒171-8588 豊島区目白1-5-1 学習院大学文学部教育学科 宮盛邦友研究室

電話・FAX: 03-5904-9348 (直通) HP: <http://synthetic-anthropology.org/>

- I. 新会長挨拶
- II. 大会総会開会の辞
- III. 第15回大会報告
- IV. 総会報告
- V. 小林直樹先生を偲ぶ会報告
- VI. 2021年度活動日程など
- VII. 事務連絡

I. 新会長挨拶

学会のこれからへの期待 (新会長の挨拶)

古沢広祐 (國學院大學研究開発推進機構 客員教授)

これまでの学会は、総合人間学会の設立 (2006年) に直接関わられた第1世代と言ってよい方々によって、牽引されてまいりました。尾関前会長の挨拶にもありましたが、設立当初の錚々たる方々が次々と引退され、本学会はまさに世代交代の渦中にあります。その点では、設立に直接関与していない学会長としては初めてになるのではないかと思います。はたして世代交代に向けて本学会を担いきれるか、心もとない限りなのですが、諸先輩のアドバイスや導きによってチャレンジしたいと決意いたします。

本学会には小原秀雄先生のご縁で、比較的初期の学会誌 (総合人間学2) などに執筆させていただきましたが、本格的な関与はここ10年程のことで、主に研究談話委員会での活動にて関わりました。昨年に國學院大學 (経済学部) を定年退職したことや比較的学際領域を渡り歩いてきたことなどから、尾関前会長からの推薦もあって、今回会長職を引き継ぐことになりました。ここでは簡単に自己紹介をして、総合人間学会への期待を述べさせていただきます。

ふり返れば戦後間もない幼少期、都内でも原っぱがありトトロの森的な世界が近隣にあったことが思い起こされます (1950年東京生まれ)。青少年期には天文・宇宙に関心があったのですが、父親の病気を契機に食養生 (桜沢如一、玄米正食) との出会いがあり、生命科学への関心を持つようになりました。感化された書物に『人間この未知なるもの』 (アレキシス・カレル著、桜沢如一訳、角川文庫、1969年、第25版) があります。高度経済成長をへた頃の大学入学当時 (大阪大学理学部生物学科)、ちょうど学生運動隆盛期で、バリケード封鎖で半年以上授業無しの状態でした。まさにコロナ禍でのロックダウン状況と重なって思い起こされます。そこでは自主講

座運動が起き、現実の社会問題（当時は公害、自然破壊が深刻化）を現場に出向いて学生・教員・市民が対等に学び合う場が形成されており、社会問題への関心を強く喚起されました。

各大学での自主講座のみならず、キャンパスを飛び出して全国各地の現場でテント合宿（2週間）する学びの場「移動大学」（KJ法と文化人類学・探検学で知られる川喜田二郎氏が主宰）が開催されて、初回（1969年、長野県黒姫高原）から参加しました。その後、大学の平常化に違和感を覚えて一時休学し、各地の地域住民運動から多くのことを学ぶ機会を得ました。多少の曲折を経て、有機農業運動との出会いを契機に農・食・環境に関する内外の諸運動に関わり、一種アクションリサーチ的な生き方の延長線で大学院生活を送って（京都大学大学院農学研究科、農林経済・農学原論）、幸運にも博士号（農学）を取得し、学問・研究の道を歩むことができました。在野生活もありましたが、大学に職を得た後は基本的に二足の草鞋として、NGO活動にも関し続けています。とくにグローバル化が進展してきた昨今、国連環境開発会議（地球サミット、1992年）、食糧サミット（1996年）、気候変動や生物多様性の国際会議、国連70周年総会・サミット（2030アジェンダ、SDGs採択）などの現場にて、参与観察を行ってきました。

この間、米国滞在中（サバティカル研究期間）に同時多発テロ事件（9.11、2001年）に遭遇したり、大学での学際研究プロジェクト（共存学）で東日本大震災（3.11、2011年）の被災地調査に関わったことや、さらに個人的な出来事として大病（脊髄腫瘍の手術）を経験したことなどもあって、あらためて人間世界とその存在の不可思議さに目覚める経験を重ねました。その意味では、今回、総合人間学会の会長役を引き受ける機会を得たことは、自分なりに総括をする契機となりそうな何かの縁でもあるような期待感も抱いております。

コロナ禍、気候危機、AI・デジタル経済・合成生物学の進展、そして世界情勢の不安定化など、人間社会の根底が大きく揺らぎ始めています。まさに現代世界において、人間の在り方の本質を総合的に見つめなおすことが、今ほど求められているときは無いでしょう。改めて、総合人間学会の役割が問われており、この学会の場にて、皆さまとともに困難な諸課題について探求していきたいと思っております。まだまだ未熟で暗中模索のような気持ちでおりますが、心機一転して皆さまのご協力が得られますよう努めますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

II. 大会総会開会の辞

（事務局からお願いして大会総会での「会長挨拶」を採録させていただきましたため口語表現となっております。）

2021年総合人間学会総会 会長挨拶

尾関周二

本日は総会にご参加いただきありがとうございます。オンライン大会ということで、いろいろご不便もあろうかと思いますが、皆様のご協力で有意義な大会にすることができれば幸いです。

昨年は、コロナ禍で、対面のみならずオンラインでの大会開催も困難ということで、総会に匹敵する代替理事会を開催するという対応しました。この対応の経緯はこのあとに会則などの資料で紹介されます。あれから1年で、この間に運営委員会・理事会や研究会・談話会、各種委員会などの必要な会議をオンラインによる皆さんの努力で開催してきました。そういった経験の積み重ねによる関係者のご尽力で、今年は大会の総会やシンポジウム、研究発表もオンラインで開催することができるようになりました。関係者の皆様に心から感謝いたします。

この1年は、コロナ禍という未曾有の経験をしましたが、我々・学会にとっては、コロナ禍に匹敵するような大事件が起きました。それは、ご存じのように学術会議問題です。菅首相による6名の任命拒否の問題です。この問題は、学問の自由、表現・言論の自由という視点から極め

て大きな問題で、日本社会の在り方が自由で多角的なあり方が縮減され、権力集中による一元化支配を目指す過程において位置づけてみる必要があるかと思います。コロナ禍によって、デジタル化が遅れているとって菅首相が「デジタル庁」を前倒しで発足させようとしているのも、こういった同じ傾向のなかで位置づけられるのではないかと思います。いずれにせよ、コロナ禍問題と学術会議問題という、この二つの大きな出来事に対して本学会は適切な対応をしてきたと思います。そして、この二つをテーマにした書籍を特別号として発刊することにしています。少し遅れていますが、7月には発刊されると思います。

さて、私は、この大会を期に会長を退任することになります。任期途中と思われるかもしれませんが、会則により会長職の任期は2期4年と定められており、前任者が任期途中で辞められたことにより、私も任期途中での退任となります。この点、ご理解いただければ幸いです。

私は、総合人間学会の設立（2006年）にかかわりましたが、その学会設立前に5年ほどの総合人間学研究会の時期がありますが、それから数えると、20年近く関わっていることになります。（学会設立当時のより詳しい事情を書いた拙稿は最近発刊されましたオンラインジャーナル15号に掲載されていますので、それを参照して頂ければ幸いです。）この学会は設立当時おそらく日本で最も高齢者の比率が高い学会だったと思います。学会設立当時、小林会長、小原副会長をはじめ多くの主要メンバーが70歳代以降の方々でした。主要メンバーのなかで一番若かった私が60歳前後でしたので、この学会の年齢の高さが想像されると思います。この間、若手研究者奨励賞の創設の提案や若手委員会の重視なり、私なりに学会の若返りのための努力をしてきましたが、当時からすると、現在は、相当若返えることができたかと思います。

ところで、私が会長になってからのこの4年間における新規の施策を振り返りますと、まずワーキンググループを設置しました。その課題としては、一つは、学会設立時に作成された「総合人間学会趣旨」のバージョンアップです。第二は、KW集発刊の委員会の設立です。前者は、「総合人間学会趣旨新版（2019）」を作成し、今日的なバージョンアップをすることができました。後者のKW集発刊委員会は活発な議論を続け、現在も具体化の作業が進行中です。

また、学会の顔である学会誌をめぐるでも色々議論があり、紙媒体の書籍を止めようという意見もありました。しかし、議論の末、雑誌の電子ジャーナル版と書籍版というそれぞれの特色を生かす仕方での二本立ての発刊ということになり、また、書籍発刊のためのより適切な出版社も見つけることもできました。

私としては残念な、実現できなかったもう一つ大きな課題としては、学会設立10余年を経て蓄積された成果を2、3巻本ぐらいの記念書籍にして発刊することです。これはいつか適切な機会（たとえば、20周年記念）に実現されることを期待したいと思います。

また、学会の役員組織の改革の課題です。いまでは設立時から条件もいろいろ変わってきており、それを考慮した改革の必要性を感じ、じつは、一昨年この課題を担うワーキンググループを発足させて検討に入りたいと思っていました。元事務局長の黒須先生に副会長になって頂いたのもその関係ですが、その矢先にコロナ禍が襲い、この難しい課題をじっくり議論する状況ではなくなりました。これについてもアフターコロナの適切時期に検討する課題として引き継いでもらえればと思います。

私としては、今後も、できる範囲で私なりに協力をして行きたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

III 第 15 回研究大会報告

シンポジウム

第 15 回研究大会のシンポジウムは、「人新世と AI の時代における人間と社会を問う」というテーマで、2021 年 6 月 19 日 13 時 30 分から休憩をはさみ、18 時までオンラインで開催された。パネリストは柴田邦臣（津田塾大学／学芸学部 国際関係学科）、大倉 茂（東京農工大学／哲学、倫理学）、中野佳裕（早稲田大学／社会哲学、開発学、平和研究）であり、第二部の指定討論者は佐貫 浩（法政大学／教育学）が担当した（敬称略）。

オンライン開催に先立ち、5 月 29 日に事前録画を行い、理事会メンバーを中心とする視聴者も参加して、当日と同様のスケジュールで行われた。これにより、大会当日の第一部は録画の放映となり、6 月 10 日からは、参加登録者にたいして、YouTube を使った録画配信を行い、第一部の事前視聴を可能にした（大会前日までに 166 回のアクセス）。第二部からは、オンラインでの自由討論となった。オンライン開催は初めての試みだったが、オンライン大会のためのチームをつくり（責任者古沢広祐、運営責任者大倉茂、Web 担当太田明）システムの設計（学会として ZOOM 利用契約、大会 Web サイトの立ち上げなど）と運営にあたった（運営スタッフは実行委員以外 1 日目 3 名、2 日目 4 名）。大会 Web サイトから事前参加登録、ミーティング URL の管理、参加者への情報配信などを行った（当日参加者 52 名）。また、原則シンポジウムに限り、非会員の参加も認めた。

第二部の冒頭、3 名のパネリストから、改めて講演の概要、ならびに特に問いかけたいことについてご発言いただき、続いて指定討論、自由討論に移った。討論は活発に進み、終了後の振り返りで、シンポジストの中野氏から「自分の専門領域にピタッと合うトピックで報告を行えたのは、おそらく帰国後初めてで、本当に楽しい時間でした。」との感想が寄せられた。

このシンポジウムで出された問いを、研究談話会などで深めつつ、2022 年 6 月に開催予定の研究大会へと発展させることが課題である。今後、シンポジウムの内容を中心とした書籍版の企画、発行をすすめ、ニュースレターの発行とも連携したい。（実行委員長 中村俊）

ワークショップ企画 α

総合人間学会第 15 回研究大会の 2 日目に「ワークショップ企画α—新反動主義にどう対抗するか—」が催された。大倉茂（本会、若手委員長）が司会を務め、佐藤竜人（東京大学大学院／政治思想）と本多俊貴（拓殖大学他非常勤講師／社会学）が報告者を担った。

本ワークショップは、従来の若手シンポジウムを引き継いだ企画であり、報告者が勉強会を重ねながら、テーマと論点を設定してきた。今回は、前回大会が見送られたため、約 1 年半に及ぶ勉強会を重ねることとなった。ワークショップ企画における検討内容の詳細は、来年度の『オンラインジャーナル総合人間学』に報告論文として掲載される予定であるため、是非ご一読いただきたい。以下、ごく簡単に各報告者の議論を紹介する。

佐藤竜人による「Staying with COVID-19?—絡み合った主体の構想に向けて」は、ポスト・ヒューマニズムの議論をめぐって、ポスト・ヒューマニズムは近代的な考えを根本的な反省のないままにさらに推し進める反動であると規定し、近代的な主体にかわる絡み合った主体という概念の構想を提示した。

本多俊貴による「農林業・地域社会の共同化をめぐる住民の志向性と村落—加速・反動しえない山村を考える」は、実証的な研究を踏まえて、戦後以降の加速的な産業化の帰結として痛めつけられていた山村の姿を描きつつ、現代の共同性に注目して反動しえない山村のあり方を論じ

た。

「ワークショップ企画α」では、Zoomによるオンライン開催ではあったが、参加者との質疑応答の時間を十分に取しながら、活発な意見交換を行った。ここでは、「脱成長をいかに捉えているのか」等の両報告者に共通したご質問と、報告者それぞれの研究に寄り添ったご質問・ご意見の双方をいただき、刺激的な議論を行うことができた。筆者は、2017年の若手シンポジウムにも参加させていただいたが、若手の大胆な問題意識に基づいた報告を会員の皆様とじっくり議論させていただけることは、大変貴重な機会であると感じている。

研究領域の異なる若手研究者が、時間をかけて思い切った企画を練り、会員の皆様と率直な意見交換を行わせていただけたことに、改めて感謝申し上げたい。(本多俊貴)

ワークショップ企画 β

15回研究大会の2日目、6月20日(日)にオンライン開催されたワークショップβについて報告する。本ワークショップでは、報告者3名・コメンテーター1名を迎え、ここ数十年で国境をこえて著しく進展してきた東アジア史研究と、昨今再び注目が集まっているジェンダー分析の視座から、1920年—30年代の帝国日本における女性たちの活動の諸相を検討した。

第一報告者の井上直子(足利大学ほか非常勤講師)は、「1920~1930年代初頭の愛国婦人会における「勤儉」意識の涵養」というテーマで、愛国婦人会を手がかりに、「勤儉」意識の涵養という切り口から、昭和初期の日本内地の女性たちが、アジアと切り離された「日本」女性としての自己意識が強化されてきた過程を明らかにした。このような内地女性たちが置かれた「日本」への「包摂」という状況の対岸には、アジアとの交流の試みが根強く続いていた。第二報告者の楊佳嘉(名古屋大学人文学研究科博士候補研究員)は、「『輝ク』における中国表象—『女人芸術』との比較を通して」というテーマで、1930年代の日本文芸界におけるインテリ女性たちをつなぐ場、輝く会の機関紙である『輝ク』を研究対象として、その中における中国に関連した記事の特徴とその変化のプロセスを明らかにした。第三報告者の蔭木達也(慶應義塾大学経済学部助教)は、「高群逸枝における「日本」とは何か—1924年の「排日問題」と34年の「日本精神」との対比から—」というテーマで、女性自身の側に生じたアジアの中での「日本」を意識する思想について報告した。

コメンテーターの柳沢遊(慶應義塾大学名誉教授)は、1930年代前半の日本女性においてはファッション化の傾向よりも第一次世界大戦以来の日本で広がった女性の社会参画に向けた思想潮流の継続が見られることを指摘し、十五年戦争期をそれより広い時間軸で捉えつつ研究を深化させることの意義を述べた。会場からは、先行研究に対する新たな解釈の可能性や、現代的意義を問う質問などが出され、活発な意見交換がなされた。

学会大会の新たな試みであるワークショップ企画の公募に採択されたのは2020年春、開催は当初2020年6月に予定されていた。コロナ禍で1年延期となったが、学会関係者の尽力および登壇者の協力により無事開催できたことを、企画責任者として改めて感謝申し上げたい。(蔭木達也)

iii. 一般研究発表

A 会場

砂子岳彦・福田鈴子 「人間とは何か」をモデルによって答える：現象学的視点から」

岡部光明 「人間の社会的つながりと利他性：主流派経済学の盲点」

岩田好宏 「野生世界と人間世界」

鈴木伸国 「人間概念における平等概念の意義」

座長：北見秀司、関 陽子

出席者数は全体を通じて 24-27 名だった。

砂子岳彦・福田鈴子氏の報告（ただし当日発表を担当されたのは砂子氏のみ）「『人間とは何か』をモデルによって答える：現象学的視点から」では、フッサールからレヴィナスに至る現象学の運動が鳥瞰され、そこから、ある実存的構造が明らかになること、さらにこの構造には「内属的共同性」が見られ、これにより「調和的認知」の可能性が担保されていること、が論じられた。そしてこの「調和的認知」の事例として、水俣病患者認定運動の最前線で闘った緒方が、認定申請を取り下げ、加害者であるチツソを許したことが挙げられ、これは発表者によればチツソが内なる他者として受容されたことを意味している、と論じられた。つづく質疑応答では、このような「調和的認知」の考え方では、「調和」の名の下に支配的権力の盲目的な受容が認められてしまう危険がないか、という疑問が投げかけられ、議論された。

岡部光明氏の報告「人間の社会的つながりと利他性：主流派経済学の盲点」では、現在の主流派・新古典派経済学的前提である利己主義的个人主義観は、最近のネットワーク科学が明らかにする事実、すなわち社会的ネットワークは利他心を生み出し共有資源（社会関係資本）を創出するという事実が考慮されておらず、一面的であることが、論じられた。質疑応答では、貧困の伝播をどう考えるか、複雑系科学との関係、非主流派経済学におけるこの発表の位置づけなどをめぐって質問され、論じられた。

岩田好宏氏の報告「野生世界と人間世界」では、まず、生物世界は人間との関係から見ると、人間が放置すると消滅してしまう「人間世界」（したがってこの世界には農村も含まれる）と、それ自体で存続できる「野生世界」によってなること、そして現在の日本列島では、「野生世界」は 20%未満であることが示され、この現状をどう見るかが問われた。質疑応答では、外来種駆除をどう見るか、また発表者は農業を一種の自然破壊であると論じているが、里山プロジェクトなどを通じた自然との共生の試みはどう評価されるべきか、といった質問がなされ、議論された。

鈴木伸国氏の報告「人間概念における平等概念の意義」では、今日における普遍的「平等」概念を構築することの難しさが論じられた。その理由のひとつは人間概念の曖昧さにある。様々な学問分野から「人間とは何か」を問うことができるが（問いの開放性）、そこから普遍の人間観を取り出すことは困難であり、くわえて人間に対する非本質主義的立場もある。また、歴史的には「人間」という観念は、「われわれ」に属さない人間を排除するという機能をもちつつ、すなわち不平等を生み出しつつ、形成されてきた。これもまた排除のない「人間」の「平等」観念が構築しにくい理由となっていると思われる。質疑応答では、まさしく「平等」を考えるために前提となる観念の必要性をめぐるものだった。（北見秀司）

B 会場

倉本 宣・Wu Ximei 「コロナ禍で顕在化した都市緑地における市民と自然の関係」

竹ノ下祐二 「人類史的観点からコロナ禍における「新しい生活様式」を考える」

竹中信介 「人新世の時代に自然観を問いなおす—総合人間学の提唱者・廣池千九郎の自然観を手がかりに—」

宗川吉汪 「3・11 原発事故が明らかにしたこと」

座長：亀山純生 福井朗子

B 会場では、倉本宣・Wu Ximei 会員、竹之下裕二会員、竹中信介会員、宗川吉汪会員の 4 名による研究発表が行われた。前半の司会を亀山純生先生が、後半の司会を福井が担当した。

竹中会員の発表は今回の大会テーマでもある「人新世」に呼応したものであり、人新世時代の自然観について、独自の総合人間学を提唱者した廣池千九郎氏を通して検討するものであった。発表者からは自然と人間を調和的に捉えた彼の思想の先駆性と、その自然観が人新世時代におい

て積極的な意味を持ちうるとの報告があった。廣池氏の実践やその思想を具体的に示すような写真も資料として紹介された。参加者からは、自然界に目的はなく生物は調和を求めているとする世界観や自然観があり、そのような思想との兼ね合いについて質問があった。

続く吉川会員からは、3.11の原発事故から10年という年月の中で明らかになってきたことについて報告が行われた。実際に福島第一原発を視察した体験も交えての発表となっており、「原発は未完の技術などではなく、未来永劫に完成しない絶望技術」との指摘からもわかるように、原発に対する強い危機意識に立った内容となっていた。参加者からは、原発に関わる技術者について質問があった。質問者とのやりとりのなかで、技術者との対話の可能性やその必要性が確認された。

このC会場の4名の発表に共通していたことは、人間と自然との関係性や人間の本質を問うていた点である。これまでの総合人間学会の一般発表においてもこのような問題意識に立った発表は見られたが、今大会では新たな社会問題である新型コロナウイルス感染症を切り口とした発表があり、それがオンライン形式で行われたということが第15回大会のひとつの象徴的な出来事のように感じられた。(福井朗子)

C会場

楊逸帆 「アドラー・ヨウラーニング・バイ・ケアリング (Learning by Caring) ——教育における配分依存から互惠共生への試み——」

前島康男 「秋葉原無差別殺傷事件に関する一考察——主に「教育家族」の「よい子」に視点を当てて——」

野口友康 「リスク論の視点からとらえた予防接種施策」

座長：太田明 田中昌弥

C会場では、1)アドラー・ヤン会員、2)前島康男会員、3)野口友康会員からの3つの報告があった。以下のような報告の後、多くの質問があり、活発な意見交換が行われた。

1)「ラーニング・バイ・ケアリング」では、台湾のオルタナティブ教育に関するドキュメンタリー映画を作成した報告者が、学び方改革の実践を研究へと仕上げる試みの一部を紹介した。

報告者は教育における学び方の問題を「教育における配分依存」ととらえ、そこからの脱出の方向を「互惠共生」に見出した。「配分依存」は、あらかじめ設けられた「枠」をかたどる方向に自分が追い込まれることでさまざまな無理を引き起こす。それに対して、思いやり(ケアリング)においては、学びと資源が自ずとフィードバックされる。報告者はこの「ラーニング・バイ・ケアリング」を「徳」という概念と結びつけて、「徳は得なり」(徳(得)によって学んでいき、学びによって徳(得)になる)とモデル化した。

2)「主に「教育家族」の「よい子」に視点を当てて」は、秋葉原無差別殺人事件の犯人に焦点をあてた発表であり、この事件の本質を「教育家族」の「よい子」、「孤独」、「しつけ」という三点から分析した。報告者によれば、親の期待を一身にうけた「よい子」は、主体性を押さえて頑張るが、人付き合いが苦手な「孤独」である。同時に親からは「しつけ」として厳しい行動規制を受けることが多い。犯人はその空白を埋めるためにネットの掲示板に居場所を求めた。しかし、それが「なりすましと荒らし」によって奪われたことから、他者への行動規制としての「しつけ」として事件に及んだ。

「人と関わりすぎると怨恨で殺すし、孤独だと無差別に殺すしむずかしいね。『誰でもよかった』なんて分かる気がする」という犯人の言葉が事件の本質を鋭く突いていると報告者は指摘した。

3)「リスク論の視点からとらえた予防接種施策」で報告者は、まず「リスク」という言葉の語

源をさぐり、次にオートウィン・レンのリスクの分類とアンディ・スターリングと不確実性のマトリックスの研究を紹介し、最後にそれをワクチン接種に関する「リスク」にあてはめて考察を行った。

レンの視点からすれば、予防接種は集団の感染症回避という社会的な側面と副反応回避という個人的な側面のディレンマの中に位置しており、テクニカル・経済的アプローチのような一面的な視点のみでは解決できないさまざまな社会的複雑性が存在することから、リスクの社会論を広く考慮に入れる必要がある。スターリングの視点からは、ワクチン接種に関するリスクと「不確実性」、「曖昧性」、「非知」複雑性の領域を厳密に区別するフレームワークが必要との示唆がえられる。

さらに、フーコーの言説理論、生政治を援用して、言説の現出とその対抗の構造を明らかにすることが必要だと指摘した。（田中昌弥）

IV 総会報告

会長挨拶（→「II 大会総会開会の辞」に再録）

2020 年度研究大会および総会のオンライン化

宮盛事務局長から 1) コロナ禍での 2020 年度研究大会のオンライン化、および 2) 通常形式で総会が開催できない緊急事態が発生のため、前年度活動報告・決算、今年度活動計画・予算を総会に代わって理事会が代替承認し、将来、開かれる「総会」において事後承認を受けることとしたことについて、会則、2020 年 5 月 1 日付会長告知などの資料にもとづき報告がありました。また今次総会において同件は事後承認されました。

2020 年度委員会活動報告（報告事項） ・ 2021 年度委員会活動計画（審議事項）

各委員会から 2020 年度活動が報告があり、2021 年度活動計画が提案され、承認されました。

1) 編集委員会（委員長 河上睦子）

◇2020 年度編集委員会：河上睦子(委員長)、河野貴美子（副委員長）、北見秀司（副委員長）、オブヒュルス鹿島ライノルト、片山善博、西郷甲矢人、斎藤利彦、長谷川万希子、鈴木朋子（編集事務幹事）、下地秀樹(アドバイザー)、宮坂瑠子(アドバイザー)

(1) 編集委員会（オンライン会議）の開催

第 1 回：2020/6/20、第 2 回：10/17、第 3 回：12/13、第 4 回 2021/2/4、第 5 回：/5/22

(2) 委員会活動

- ・オンラインジャーナル版『総合人間学研究』第 15 号の発行。刊行は 2021 年 5 月末日である。内容：「特別報告」尾関会長、「投稿論文」3 本、「海外投稿論文」1 本（原文はドイツ語、日本語訳のみ掲載）、「研究ノート」2 本、「エッセイ」2 本、「各種委員会からの報告」4 本、「書籍紹介」5 本。
- ・編集過程での問題：査読対象の投稿論文はエントリー数：12、投稿数：9、掲載数：3 であった。なお 2020 年度大会の中止により、エントリーの締め切り日を 7 月 31 日から 8 月 15 日に延期した。「投稿論文」「研究ノート」「エッセイ」の明確な区分けについて、来年度検討することになった。

- ・査読・判定について：査読判定が分かれた場合の対応、査読後の修正論文への再査読の取り扱いについて、「内規」をつくる必要がある。来年度検討することになった。

(3)「投稿規程」を改訂した(2020年6月20日)。

○2021年度活動計画

- ・『総合人間学会』研究大会(オンライン開催)2021年6月19・20日を踏まえて、『総合人間学研究』第16号を、2021年度編集委員会のもとで刊行予定である。
- ・昨年度編集上の問題であった「査読」判定などについての内規を作成したい。
- ・新編集委員を迎えて、仕事の分担をし、委員会の刷新をはかりたい。
- ・「投稿規程」の改定(2021年度版)を試みたい。

2) 出版企画プロジェクト (委員長 中村俊)

1. 学会誌15号(特別号)の出版

「コロナ禍を生きぬく、問いあい・連帯する社会を創造できるか
～いのちのつながり、子どものまなびと学術の自由の危機が問うもの」

タイトルは上記とし、8名の執筆者を予定したが、6名からの入稿となっている。今後、編集会議を行い、タイトル、目次、サブタイトルなどを最終的に確認後、5月末に出版社に入稿する予定で進めている。したがって、出版は8月末を見込んでいる。学会開催時とずれるため、会員への発送作業、販売促進などが課題である。

この遅れは、コロナ禍で執筆予定者自身にもさまざまな生活上、仕事上の困難が生じ、また調査、研究、論考を見直す必要に迫られたことが背景にあると考えられる。新型コロナウイルス感染が長期化・深刻化するという、かつていない状況への応答過程で生じている事情であると考え、それゆえの総合人間学的な議論・認識の深まりに期待したい。

2. 学会誌16号の出版

2021年6月19日開催予定のシンポジウム「人新世とAIの時代における人間と社会を問う」の報告、指定討論を中心に、そのテーマをさらに深化させる企画を組む。今日の資本主義的世界を重層的に問い、「脱成長」のテーマをさらに掘り下げる企画を検討している。研究談話会と連携して、若手、女性を含むあらたな執筆者を発掘することも課題としたい。

3) 研究談話委員会 (委員長 古沢広祐)

◇2020年度活動報告

2020年度の研究談話委員会は、コロナ禍という事態もあってフレキシブルな対応をおこなった。これまでの対面を前提にした会合から急遽、オンライン(リモート)を活用しての企画として、以下のように取り組んだ。

第1回研究談話会(オンライン開催7月18日)「コロナ危機をどうとらえるか」(報告、古沢広祐)、第2回研究談話会としては「コロナ禍と総合人間学」(9月12日)報告1「新型コロナをどうとらえるか?」(報告、宗川吉汪)、報告2「共苦か怨恨的復讐か?—コロナ禍問題が再び浮かび上がらず問題軸」(報告者、清真人)、第3回研究談話会としては「学術会議問題と学会声明から、学会と学問のあり方を考える」(11月7日)報告者(三浦永光、柳沢遊、降旗信一、木村武史)を開催した。

またKW委員会との合同開催で、KW公開委員会「総合人間学について」(12月12日)、「私の総合人間学」について関係者の報告(数名)をもとに開催し議論した(KW委員会報告参照)。さらに、第15回研究大会ワークショップ「プレ企画、独立拡大オンライン研究会(2021年4月25日)」を、ワークショップ企画者のもとでテーマ「総合人間学独自の的方法論はありえるのか」として実施、開催した。

他方、独自企画で行われてきた関西談話会については、実開催の予定がコロナ禍の事態によって延期を余儀なくされて未開催となった。

各開催企画の内容に関しては、学会オンライン電子ジャーナル第15号で委員会からの報告として、宗川吉汪氏、清真人氏、柳沢遊氏の3名の方の報告が掲載されている。また近く刊行される書籍版においても、関連の内容が掲載される予定である。

○2021年度に向けての活動計画

コロナ禍の状況が見通せない中で、オンライン（リモート）活用が急加速的に進展しつつある。実開催での密度の濃い集会在困難な中で、交通手段や会場場所の（時間的・場所的）制約を受けないオンライン情報ツールの活用については、最大限に活用する方向性で積極的に取り組んでいきたい。具体的には、学会の研究活動を活性化していくために研究部会（自主企画グループ）を募り、Zoom会議形式で開催運営を支援していくことにしたい。

当面の第1回研究会としては、7月25日（日）午後1時半～5時半、報告者2名（仮題「21世紀の変革思想へ向けてー環境・農・デジタルの視点から」尾関周二、（仮題）「資本主義を再考する～<資本主義政治>の視点から」北見秀司）のオンライン開催を予定している。その後に「人間にとって資本主義とは何か」という問題意識で自主研究部会を発足する案が出ている。

（＊後日、7/25研究会テーマは前半だけとなり、後半テーマの報告は延期となった）

また、書籍版『総合人間学15』（7月刊行予定）の合評会を、第1回運営委員会・理事会（8/7土）の後に予定している。そして、KW（キーワード）委員会と協力して次年度もキーワードのテーマ研究会（総合人間学の方法論、他）などもまた適宜、計画されていく予定である。

さらに、内外の距離的制約をこえての活用としては、オンラインを利用した国際交流などの可能性を考えていきたい。この間、国外から学会員の積極的な参加があり（具体的には台湾のアドラー楊さんが研究会に毎回参加）、オンラインを活用した国際研究交流の可能性について前向きな提案がだされていることから、検討していきたい。

今後とも、コロナ禍のなかで本学会の活動が停滞することのないよう、学会員の各種意見を汲み上げながら次年度の研究談話委員会を中心にして、総合人間学会が担うべきポストコロナ時代を見すえた取り組みを期待したい。

4) キーワード（KW）発刊委員会（委員長 長谷場 健）

◇2020年度活動報告

2020年度のKW委員会は、コロナ禍中7回のZoom会議を開いて「総合人間学KW集」発刊に向けて記述モデルを討議した。そのKW集記述モデルの概要は「KW集発刊委員会2020年報告」として2021年オンラインジャーナル「総合人間学研究第15号」に、さらに「KW集記述モデル」自体は総合人間学会ホームページ（HP）に近く掲載予定である。

なお、12月12日には「私の総合人間学」をテーマとしてKW公開委員会を研究・談話委員会と合同でZoom開催した。関係者5名に報告してもらい、参加した一般会員と共に討議した。その討議を踏まえて、各報告者にはKW集記述規定に従って「総合人間学試論・私論」の執筆を依頼し、学会HP掲載用の「KW集記述モデル」に掲載した。

また、2021年4月25日には「総合人間学独自の方法論はありえるのか」をテーマとして研究・談話委員会+KW委員会を合同開催した。

○2021年度に向けての活動計画

今後、KW委員会の前身である総合人間学KWワーキンググループが提出した「総合人間学KW50項目」および会員アンケートで寄せられた推薦KWを整理統合しKW項目リストを作成する予定である。そして、「KW項目リスト」、「総合人間学KW集記述モデル」、「執筆者KW集記述要項」を学会HPに掲載し、会員に各項目のKWの記述を依頼または公募する予定

である。そして、会員の関心の高いと思える KW に関しては研究会を開き、そこで執筆者予定者を囲み、KW 記述に関して総合人間学会にふさわしい内容にするための討議をできたらと考えている。

5) 広報委員会（委員長 太田明）

◇2020 年度活動報告

- ・学会ウェブサイトの更新を行った。
- ・オンラインジャーナル No.14 (2020 年度)を掲載した。
- ・第 15 回研究大会のオンライン実施について(実行委員会への協力として)、ZOOM を通常+1ホストの 2 ホスト体制で実施(宮盛事務局長と協議済)。1 ホスト追加は 2000 円/月。

6) 若手委員会委員長（委員長 大倉茂）

◇2020 年度活動報告

- ・2021 年開催の第 15 回研究大会における若手ワークショップの開催。
- ・各種勉強会の開催。

○2021 年度に向けての活動計画

- ・次年度研究大会での若手ワークショップに向けた勉強会などの継続開催。
- ・コロナ禍収束後の若手委員会、各種勉強会の開催。
- ・新体制構築に向けた準備。

6) 事務局

◇2020 年度活動報告

1. 財政健全化と会員拡大の取り組み: 今年度も、時期を決めて会費未納会員への督促をおこない、財政健全化を図った。並行して、会員の拡大に努めた。
2. 事務作業の負担の分散と効率化: 会計業務の効率化について、黒須三恵・副会長が事務局アドバイザーに就任されて、その効率的な在り方を探っていった。

○2021 年度に向けての活動計画

1. クラウド型会員情報管理システム（「新システム」）の導入について: 「新システム」の積極的活用に向け、会員への説明を徹底させ、事務局機能のみならず、学会機能全体の活性化を図りたい。
2. 財政健全化と会員拡大の取り組み: 今年度も、時期を決めて会費未納会員への督促を行い、財政健全化を図る。並行して、会員の拡大に努める。
3. 事務作業の負担の分散と効率化: 総務、会計事務、編集事務にそれぞれ幹事を置くことで、幹事の業務負担の軽減を図りつつ、「新システム」の機能をフル活用することで事務局機能を強化し、学会活動のさらなる展開に寄与できる新たな事務局体制の構築を目指す。

2020 年度決算および 2021 年度予算

二名の監事による監査報告とともに宮盛事務局長のから報告があり（一部修正確認）、次頁のとおり承認されました。

2020年度決算(報告)期間 2020年4月1日～2021年3月31日

収入の部	2020年度決算	予算
年会費	1,106,000	1,256,000
今年度・一般会員	719,000	973,000
今年度・減額会員	68,000	108,000
他年度年会費	319,000	175,000
寄付金・特別講演会収集金(大会除く)	22,000	32,000
大会開催時におけるその他の収入	0	8,000
書籍売上	0	88,000
利息	9	0
繰越金	266,543	270,910
収入合計	1,394,552	1,654,910
支出の部	2020年度決算	予算
大会運営費	0	300,000
年会費等振込手数料・引出手数料 他	3,600	2,000
理事会・運営委員会活動費	0	10,000
会議費(茶代等)	0	8,000
通信費(談話会用ハガキなど)	0	2,000
研究・談話委員会活動費	3,820	30,000
研究会・談話会開催費(講師謝金など)	0	20,000
郵送費(談話会案内はがきなど)	2,400	2,000
その他(会場代・文具代など)	1,420	8,000
若手委員会活動費	0	30,000
交通費	0	25,000
その他(会場代など)	0	5,000
広報委員会活動費	0	10,000
チラシ発注費	0	5,000
その他	0	5,000
事務局活動費	195,924	470,000
事務用品・消耗品費	25,442	5,000
郵送費・配送代	115,482	75,000
印刷費(大会予稿集など)	0	40,000
その他(封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等)	0	5,000
交通費	0	30,000
事務局幹事報酬	40,000	290,000
会員発送作業アルバイト代	0	20,000
その他(会議室代・アルバイト代)	15,000	5,000
編集委員会活動費	67,124	40,000
オンラインジャーナル維持管理費	7,124	7,000
郵送費・コピー代	0	5,000
校正アルバイト代等	60,000	20,000
学会誌発送作業アルバイト代	0	8,000
学会誌支払(出版費用、送料)	490,000	480,000
会員管理システム導入費	146,250	110,000
会員管理システム維持費	72,523	90,000
若手奨励賞副賞費	0	30,000
学術誌積立金	50,000	50,000
予備費	0	2,910
支出合計	1,029,241	1,654,910

(次年度への繰越額) 収入合計 - 支出合計 = 365,311 円

新年度役員

第8期(2021年度)役員 (*: 新任)

会長 古沢広祐*

副会長 黒須三恵 河上睦子* 長谷場健*

理事・運営委員 (13名)

太田 明 小原由美子 オプヒュルス鹿島ライノルト 片山善博 河野貴美子 北見秀司
木村武史 佐貫 浩 下地秀樹 鈴木伸国* 中村 俊 松崎良美* 宮盛邦友

理事 (22名)

穴見慎一* 岩田好宏 大倉 茂 上柿崇英 河野勝彦 菊池理夫 木下康光 清 真人
西郷甲矢人 斉藤利彦 菅原由香 関 陽子 竹内章郎* 竹之下祐二 田中昌弥 戸田 清
長谷川万希子 福井朗子 降旗信一 水野邦彦 宮坂瑠子* 横湯園子

編集委員会編集

委員長 河上睦子

副委員長 河野貴美子 北見秀司 西郷甲矢人

編集委員 オプヒュルス鹿島ライノルト 片山善博 斉藤利彦 菅原由香* 竹ノ下祐二*
長谷川万希子

編集事務幹事 鈴木朋子

アドバイザー 下地秀樹 宮坂瑠子

出版企画委員会

委員長 中村 俊

委員 河上睦子 大倉 茂*

研究・談話委員会

委員長 木村武史*

副委員長 小原由美子

委員 上柿崇英* 大倉 茂 菊池理夫 木下康光 佐貫 浩 竹内章郎*

アドバイザー 古沢広祐*

KW集発刊委員会

委員長 長谷場健

副委員長 穴見慎一*

委員 太田 明 小原由美子 河上睦子 古沢広祐

広報委員会

委員長 太田 明

委員 福井朗子

若手委員会 委員長 大倉 茂

監事 岩瀧敏昭 柳沢遊

事務局

事務局長 宮盛邦友

事務局次長 鈴木伸国* 松崎良美*

アドバイザー 黒須三恵

名誉会長 小原秀雄

顧問 池内 了 江原昭善 尾関周二* 齊藤寿一 野家啓一 堀尾輝久 三浦永光
水田 洋 見田宗介 宮本憲一

V 小林直樹先生を偲ぶ会

宮盛邦友（学習院大学）

2020年2月8日にお亡くなりになられた、総合人間学会初代会長である、「小林直樹先生を偲ぶ会」が、2021年6月19日お昼に、おこなわれた。

小林直樹先生のご専門は、憲法学・法哲学であるが、初発の問題意識から人間学への志向をお持ちになられており、私たちが総合人間学を考える上で、いつも、その指針としてきている。

偲ぶ会では、冒頭に、尾関周二会長より、小林先生と総合人間学研究会・総合人間学会の関係を含めた、ご挨拶があった。本題としては、顧問の三浦永光先生より、小林先生の人間学の足跡の検討が報告された。その後、顧問の堀尾輝久先生より、小林先生と教育の関係が、会員の河上暁弘先生より、小林先生のヒアリングを通しての感想が、それぞれ述べられた。

私事ではあるが、私が教育法学の中でも、教育法哲学を志そうとしたのは、小林先生の問題提起を受け止めてのことである。その中心には、人間学の構築があり、総合人間学会の前身である、総合人間学研究会の発足シンポジウムでの小林先生の講演を楽しみに聴きに行ったことを、はっきりと思い出す。私たちは、つねに、小林先生の問題提起された人間学の初心に立ち戻りながら、総合人間学の構築を目指さなければならないだろう、と強く思う。

VI. 2021年度活動日程

以下予定は、変更されることがあります。ご注意ください。

理事会・運営委員会：

- 第1回 2021年8月7日(土) 13:30～15:30
- 第2回 2021年10月30日(土) 13:30～15:30
- 第3回 2022年2月12日(土) 13:30～15:30
- 第4回 2022年5月14日(土) 13:30～15:30
- 第5回 2022年6月 研究大会第一日

研究会

- 第1回 2021年7月25日(日) 13:30～16:00 (報告者2名)
- 第2回 2022年2月12日(土) 15:45～17:45

談話会

- 第1回 2021年10月30日(土) 15:45～17:45
- 第2回 2022年4月9日(土) 15:45～17:45

Newsletterは2021年8月と12月(電子配信)に、2022年4月には大会予稿集とあわせて(郵送)、発行予定です。

VII. 事務連絡

1) Newsletter のメール配信： Newsletter は今号(41号)から、郵送事務と経費削減のために、電子メール登録のある会員の皆さまには電子メールによる配信をさせていただくこととなりました。

Newsletter の発行にあわせて、学会ホームページ(HP)に、Newsletter が配信された旨告知し、会員の皆さまに電子メールでの着信をご確認いただくことといたしました。よろしくご了解くださいますようお願い申し上げます。

2) 会費納入案内方法の一部変更と HP「マイページ」へのアクセス： それにあわせて、会員の皆さまへの「宛名ラベル」での会費告知と振替用紙の同封は、機関誌などの発送時に行わせていただくこととなりました。ご納入会費の額は学会 HP でもご確認いただけます ([会員限定]>[マイページ])。

会員限定のマイページにアクセスする際は、2020年7月1日発送の Newsletter 39号(2020年6月27日発行)送付時に同封された書面、各人の「会員情報システム・ログイン情報」に記載された ID とパスワードにてアクセスしてください。

総合人間学会年会費

- ・一般：7,000円
- ・減額：4,000円 (減額は申請者のみ)
- ・加入者名：総合人間学会 口座記号番号：00180-2-579072

① 郵便局そなえつけの振替用紙、② ATM送金、③ 電子振込みに対応しています。

恐れ入りますが「通信欄」に会費種別(一般・減額)と会員番号(宛名ラベルに記載)をご記入いただければ幸いと存じます。

3) メール連絡と HP での案内： メール登録されている方に、学会メーリングリストでのお知らせや行事案内等を、随時配信しています。お使いのメーラー機能によって、迷惑メールや低優先メールなどに振り分けられてしまうことがあります。行事案内などは、学会 HP でも告知していきますので、適宜ご確認、ご覧頂きたいと思います。またもし、学会メーリングリストでの連絡が届かない方がおられましたら、事務局にご一報ください。

学会書籍

学会発行の『総合人間学』を、会員向け価格にて販売中です。

第 15 号『コロナ禍を生きぬく、問いあい・思いやる社会を創造できるか』	本体 1,500 円(税込)	→ 1100 円!
第 14 号『いのちのゆれの現場から実践知を問う』	本体 1,600 円(+税)	→ 1300 円!
第 13 号『科学技術時代に総合知を考える』	本体 1,760 円(+税)	→ 1300 円!
第 12 号『<農>の総合人間学』	本体 1,600 円(+税)	→ 1300 円!
第 11 号『人間にとって学び・教育とは何か』	本体 1,600 円(+税)	→ 1300 円!
第 10 号『コミュニティと共生』	本体 1,900 円(+税)	→ 1500 円!
第 9 号『<居場所>の喪失 これからの<居場所>』	本体 1,900 円(+税)	→ 1500 円!
第 8 号『人間関係の新しい紡ぎ方』	本体 1,900 円(+税)	→ 1500 円!
第 7 号『総合人間学を 3・11 から考える』	本体 1,900 円(+税)	→ 1500 円!

※ 送料：1～2冊(第10号以前は1冊)は180円(ゆうメール)、それ以上は別途実費を計算いたします。

※ これ以前の学会誌については、在庫を確認しますのでお問い合わせください。

～お問合せ先～

総合人間学会事務局

《所在地》〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

学習院大学文学部教育学科 宮盛邦友 研究室

《電話・FAX:》 03-5904-9348(直通)

《E-mail》 contact@synthetic-anthropology.org

《学会 HP》 <http://synthetic-anthropology.org/>